

公園の駐（ちゆう）車（しや）場（じやう）前（まへ）のベンチに座（ま）り、二人は駐（ちゆう）車（しや）場（じやう）に停（と）めている自分達のバイクを眺（なが）めながら話（わ）をしていた。

「絶対にこのままではダメです。継続（けいぞく）的な努力（どりょく）の量（りやう）も、目標（もくひ）達成（たっせい）のための思考（しこう）の深（ふか）さも彼（か）らに負（ま）けています。いつか我（われ）々は負（ま）けるでしょう。」
たしかに、辰（た）之（の）進（しん）の話（わ）にも一（いち）理（り）ある。先（せん）輩（ぱい）ライダ（ー）は、辰（た）之（の）進（しん）の話（わ）を最後まで聞（き）いてあ（あ）げることにした。辰（た）之（の）進（しん）が続（つ）ける。

「しかし、悪（あく）の軍（ぐん）団（だん）がいくら努力（どりょく）していると言（い）っても、今はまだ我（われ）々の方が圧倒（あつぱく）的に強（つよ）いと思（おも）いませんか。」

「そうだな、負（ま）ける気が（き）しない。」

「ですよ。」

—

でもね、事件（じけん）が起（お）こってからだと、被害（ひがい）にあ（あ）っている一般（いぱん）人もいるんですよ。」

「そ…そうだな。」

「先輩（せんぱい）と一緒に変（か）えたいと思（おも）うんです。やるなら今（いま）です。圧倒（あつぱく）的な力（ちから）の差（さ）がある今（いま）しかありません。でないと、いつか負（ま）けますよ。負（ま）けてからでは遅（おそ）いですよ。」

先輩ライダーは、辰之進の話を引き出そうとして言葉を足した。

「うん、お前の言うことは分かるし、正しいと思う。しかし、具体的に何をどう変えるんだ？」

「それなんです。先輩はいつも、悪の軍団と戦った後どうしてます？」

「戦った後は、そりゃ家に帰るだろう。」

「先輩。それです。我々はね、悪の軍団と戦ってやっつけるじゃないですか。そして、やっつけた後に、『はい、おつかれ〜』『また来週〜』とか言って、家に帰っちゃうんですよ。でもね、①これじゃだめです。」

問1 1 には、次の三つの文が入ります。どのような順番になる
でしょう。

ア そんな我々に対して、先に行動するのは、必ず悪の軍団の方です。

イ 悪の軍団が事件を起こし、それを察知した我々が出動するのがいつものパターンです。

ウ 負ける気がしないのをいいことに、我々は常に後手に回っています。

() ↓ ↓ ()

問2 ——線①「これじゃだめです。」とありますが、何がだめなのでし
ょうか。

ア 悪の軍団と戦った後、ラーメン屋に行くこと。

イ 悪の軍団と戦った後、寄り道をする事。

ウ 悪の軍団と戦った後、打ち上げをすること。

エ 悪の軍団と戦った後、家に帰ること。

() ()

「だめって、じゃあ何をするんだよ？」

「そんなの、後をつけるに決まってるじゃないですか。」

「ええ？でも、敵を倒しちゃうじゃん。ドカーンって爆発して死んじやうんだよ？」

「ちがいます、ちがいます。ザコキャラの方ですよ。あいつら毎週のようにじやうじゃ出てくるけど、毎週新しいザコがあんなにたくさん出てくるわけないんですよ。あいつらの何人かは、戦いが終わってから『いててて、覚えてろよ』とか言いながらアジトに帰るはずなんです。

その後をつければ悪の軍団のアジトを突き止めることができますよ。」

「（ー）」

「何を言ってるんですか先輩。アジトさえ突き止めたら、自分と、先輩と、あと他のライダーも何人か声をかけて、みんなでドーンと攻め込んだらいいんですよ。んでもって、悪の軍団のやつらをギッタギタのボッコボコにして、たたきのめしてやるんです。」

いつの間にか、空がオレンジ色になりかけている。あちこちでカラスの鳴く声がこだまする。

「①たしかに、お前の言う通りにすれば、悪の軍団を一気にたたくことができる。」

「ありがとうございます、先輩。もちろん手を貸してくれますよね。」

「(2)」

「え？なぜですか？」

「辰之進。お前はまだ新米しんまいのライダーだ。この世界この世界のことがよくわかっていない。」

「でも……」

「(3)」

辰之進の肩をポンとたたいて、先輩ライダーはヘルメットをかぶり、バイクにまたがって去っていった。

「なんだよ、『大人おとなの事情じじょう』って……。」

辰之進は、ふくれっ面つらで夕日が沈むのを見ていた。

問1 (1) (3)には、すべて先輩ライダーの言葉が入ります。それぞれの言葉が入りますか。

ア それは無理だ。

イ いいか辰之進。『大人の事情』ってのがあるんだ。またゆっくり話そうじゃないか。しかし、今日はいい話をありがとうな。お前の作戦が実行できる日がくるといいな。

ウ なるほど、ザコキャラか。って、おいおい。敵を倒した後にアジトまで追いかけるのか。結構疲れるだろうな。

1 () 2 () 3 ()

問2 ——線①のようにありますが、辰之進の作戦とはどのようなものでしょう。後のヒントを使って説明しましょう。

--	--	--

(ヒント)

ザコキャラ

みんなで攻め込む

悪の軍団のアジト

3-1 仮面ライダー辰之進 その8

次の週も、その次の週も悪の軍団が現れた。

辰之進は、その度たびに出撃しゅつげきし、悪の軍団と戦い、勝利した。

出撃すると、『仮面ライダー協会』から出撃手当しゅつげきてあてとしてお金がもらえる。

だから、①普段ふだんは特に働かなくてもお金に困ることはない。むしろ、普通に働くよりもかなり裕福ゆふくな暮らしができています。

悪の軍団から多くの人を守っているのだから、たくさんお金がもらえるのは当然と考えることもできたが、

「一体このお金がどこからきているのだろうか？」

鈍にぶい辰之進もさすがに疑問に感じるようになっていた。

もしかして、先輩ライダーの言う『大人の事情』というのとは関係あるのかもしれない。

しかし、悪の軍団の襲撃しゅうげきは、ここへ来て（ー）のように「週に一回」になっている。作戦を考えて、準備をし、怪人かいじんを用意するのだから、週一回でも大変かもしれない。悪の軍団は相変わらず働き者だな、などとぼんやり考えていた辰之進だが、同時に困り果ててもいた。

次の戦いまでがとにかくヒマなのだ。

悪の軍団の襲撃が週に一回しかないということは、実質じっしつてき的に辰之進は

週に一回しか働いていない。週休六日というやつである。人が聞いたらうらやましがるかもしれないが、辰之進はじっとしているのが苦手だ。暇ひまつぶしといってもユーチューブを見るくらいで、SNSは②『ライダー協会』から禁止されているし、ネットゲームも

「なるべくやらないでください。」

と言われている。

そこで最近になって、辰之進がはまっているのが知恵ちえの輪わだった。

「おもちゃ屋へ行こう。」

辰之進はバイクに乗って、おもちゃ屋のトイズラスへ向かった。

問1 — 線①なのはなぜですか。

ア 家がお金持ちで、いくらでもお金があるから。

イ 宝くじで一億円当てたから。

ウ 『仮面ライダー協会』から出撃手当としてお金がもらえるから。

エ 仮面ライダー以外にもアルバイトをしているから。

() ()

問2 () () に入る言葉としてふさわしいものを選びましょう。

ア 判で押した イ のれんに腕押し

ウ だめを押した エ 無理を押す

問3 — 線②について、『仮面ライダー協会』から禁止されているものには「×」、禁止されていないものには「○」をつけましょう。

() () SNS () () ユーチューブを見る

() () ネットゲーム () () 知恵の輪

知恵の輪を買うためにおもちゃ屋に入った辰之進は、お店に入って少し後悔した。

「そういえば自分はおもちゃ屋が苦手だった……」

おもちゃ屋に来てから思い出す辰之進もたいがい間抜けだが、だいた辰之進は一つのことを考えると、他のことを忘れてしまうことが多い。

(A)

こんな人間が会社勤めかいしゃづとなんかした日には、仕事ができないために秒で首になるに決まっている。ある意味『仮面ライダー』という仕事は、脳みそ筋肉、体力馬鹿、運動神経だけが(ー)の辰之進にはちょうどよい仕事かもしれない。

(B)

では、なぜ辰之進は、おもちゃ屋が苦手なのかというと、それは『仮面ライダーコーナー』に自分の変身グッズやフィギュアが売られているのが恥ずかしいからだった。

(C)

そう思いながら店内をうろうろしていた辰之進だが、知恵の輪を売っているコーナーがなかなか見つからない。広い店内をあちこち見ていた

辰之進は、自力で探すのはあきらめて店員さんに声をかけた。

「あの、知恵の輪ってどこにありますか。」

自分が仮面ライダーだとばれるとややこしいので、なるべく店員さんと目が合わないようにする。

(D)

「ああ、知恵の輪は、あちらの『仮面ライダーコーナー』のとなりです。」

『仮面ライダーコーナー』と聞いてぎくりとした表情を浮かべた辰之進は、思わずまもとに店員さんと目が合ってしまった。すると、

「あれ？あなたもしかして……」

と店員さんが言い始めたので、辰之進は

「ありがとうございます。」

と早口に言うとその店員から (2) 逃げるように『仮面ライダーコーナー』に向かった。

問1 (1) にあてはまる言葉を選びましょう。

ア 取りえ イ 弱点

ウ 手にあまる エ 玉にきず

()

問2 (2) にあてはまる言葉を選びましょう。

ア さっそうと イ そそくさと

ウ てきぱきと エ しんなりと

()

問2 次の一段落は、本文中のA～Dのどこに入るでしょう。

しかし、来てしまったものはしょうがない。なるべく『仮面ライダー

コーナー』を避けて、さっさと知恵の輪を買って、すぐに帰ろう。

()

『仮面ライダーコーナー』には、辰之進がいつも使っている変身ベルトや、愛用の武器タツノブレイドなどが、うず高く積み上げられている。

もちろんそれらはおもちゃなので、本当に変身できたり、タツノブレイドから光線が出たりはしない。

『仮面ライダーコーナー』の片隅には、フィギュアコーナーがあり、その横に知恵の輪コーナーがあった。

知恵の輪は、たくさん種類があつて、どれも面白そうだった。

辰之進が知恵の輪を物色しよしょくしていると、フィギュアコーナーで仮面ライダーのフィギュアを選んでいる親子の会話が耳に入ってきた。

「ほら、見てお父さん。タツノシンのモードブルーだよ。」

（モードブルーって、先週覚えたばかりの新形態しんけいたいなのにもうお店で売られてるのかよ。）

モードブルーは、辰之進が変身するときの新しい形態だ。これまでの普通の変身に比べて、体力を使う代わりにパワーが強い。辰之進は、そんな新形態が、すでにお店で売られていることに驚きながらその親子の会話を聞き続ける。

「あ、ほんとだ。三太はタツノシン好きだな。でもこんな間抜けなライダーのどこがいいんだ？前なんか、変身ベルト忘れて死にそうになってたじゃん。」

（げ、あのとき変身ベルト忘れたの、放送されてたのかよ。）

辰之進は、あの戦いがテレビ放送されたことを知り、恥ずかしさで消え入りたくなる。

「間抜けなところがいいんだよ。これまでの仮面ライダーが完璧すぎるの。仮面ライダーでも忘れ物するんだって思ったら、なんかほっとするよね。」

「三太の好みは変わってるね。」

「そうかな、学校でも『タツノシンはおもしろい』って言う友達がいるよ。」

「ふむ、たしかに間抜けな仮面ライダーって、新しいかもな。」

お父さんが言うと、三太と二人であはははと笑い合っていた。

（親子でおれのこと間抜け間抜けと言いやがって、ゼツタイに来週はびしっと決めてやる。）

辰之進は、そう心に決めて売り場を後にした。もちろん、知恵の輪を両手いっぱい抱えてだ。

問1 この場面をまとめた次の文の（ ）にあてはまる言葉を書きま
しょう。

辰之進は、おもちゃ屋の仮面ライダーコーナーで、とある（ 1 ）を
聞いていた。すると、その親子は、自分のことを「（ 2 ）仮面ライダ
ー」だと言って笑っている。辰之進は、来週は（ 3 ）と思った。

1 ()

2 ()

3 ()

問2 三太は、仮面ライダータツノシンのどんなところがいいと言って
いますか。

ア 間抜けで、完璧じゃないところ。

イ すごく強くて、完璧なところ。

ウ タツノブレイドがかっこいいところ。

エ モードブルーが強いところ。

()

34 仮面ライダー辰之進 その一

知恵の輪を五つも六つも買い込んだ辰之進は、自宅で考え事をしていた。

次の悪の軍団との戦いでは、モードブルーを発動して、びしっと決めてやる。おれが間抜けなライダーなんて、誰にも言わせたくない。何が『間抜けな仮面ライダー』って新しい』だ。馬鹿にしやがって。

辰之進は、恥ずかしさと悔しさでいっぱいだった。

たしかに、変身ベルトを忘れたのは間抜けだったかもしれない。

あるとき先輩ライダーに助けてもらわなければ、今頃死んでいたかもしれない。

しかし、それ以降は忘れ物をせず、しっかりと戦っているつもりだ。いや、ちょっと待て。

「ああ……」

辰之進は、思い出してしまった。

変身ベルトを忘れた次の週、辰之進は、①バイクのキーをどこかへやっ
てしまい。悪の軍団と戦う現場に、バイクではなく自転車で乗りつけた。
体力に自信のある辰之進としては「いい準備運動になった」くらいに思っ
ていたが、やはりあれも「間抜け」だったかもしれない。

「ああ……」

またまた思い出してしまった。

たしか自転車で現場に向かった次の週だった。

今度こそ、変身ベルトもバイクも忘れずに悪の軍団との戦いに臨んだのだが、何と武器のタツノブレイドを家に忘れたのだった。

タツノブレイドがないと、必殺技のタツノブレイド・ドラゴン・スレイヤーを出すことができない。

しょうがないので、ライダーキックで敵の怪人とどめを刺した。

そのときは、

「ま、こういう勝ち方もあるよね。」

ぐらいにしか思っていなかったが、テレビの前のちびっ子たちは、必殺技のタツノブレイド・ドラゴン・スレイヤーを楽しみにしていたかもしれない。

「おれは……なんて間抜けなんだ！」

辰之進は今頃になって、自分の間抜けさを自覚じかくしてしまった。

②もはや、知恵の輪をするどころではなかった。

「自分は、どうすればいいんだろう。どうすれば、一人前の仮面ライダーになれるのだろうか。」

しばらく（ー）を繰り返した後に、辰之進は決意を固めた。

自分は、もっと強さを手に入れるべきだ。

気が付いたら辰之進は先輩ライダーに電話をかけた。

「先輩。修業に付き合ってください！」

先輩に頼み込んでから、バイクにまたがって『修業の地』へ向かった。

『修業の地』は、『ライダー協会』が所有する山の一角にある。

昔は採石場だったらしく、まわりを岩にかこまれた広場で、ここであれば派手に暴れても人に迷惑はかからない。

「お前が修業をしたいなんて聞いて驚いたよ。」

先輩ライダーはすでに変身した姿で辰之進に話しかける。

「先輩。おれは間抜けです。でも、間抜けは間抜けなりに考えました。おれの間抜けはたぶん治りません。」

「うん、治らないだろうね。」

「だっ、だから、おれは（2）強くなろうと決めました。」

「ほほう。じゃあ、手加減しないけどいい？」

「え？」

辰之進はちょっと驚いた。手加減しなくてはならないのは自分の方ではないだろうか。先輩ライダーって、おれより強いのか？

と思っていたと突風つじつぐのようなライダーキックが辰之進の目の前に迫っていた。間一髪よけたと思ったら、今度は背中に重い衝撃おもしゅうげきを感じた。

(やられた……)

その場に倒れ込みそうになる辰之進だったが、痛みをこらえながらジャンプして距離をとる。

しかし、それを許さず先輩ライダーは追撃ついげきしてきた。

(速い！そして、強い！)

辰之進は、戦闘開始数秒で先輩ライダーとの実力差を感じた。

(おれも本気を出さなくては。)

そう気がはやるばかりで、実際には防戦ぼうせん一方いっぽうになり、こちらから攻撃を出す(3)を一切与えてくれない。

先輩ライダーからの一方的な攻撃は、徐々に辰之進にヒットするようになり、ついに先輩ライダーのキックを受けて辰之進はその場に崩れ落ちた。

たった数分の出来事だった。

